

---



---

 その他
 

---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 9  
P.58-65 (2021)

## 成人看護実習Ⅱ（慢性期）のオンライン実習における学習効果と課題 ～実習後のアンケート調査結果より～

### Effect and Problem of Adult Nursing Practice Ⅱ (a chronic stage) by Online — Based on the Survey Results after the Practice —

桑村 淳子<sup>1)</sup>  
KUWAMURA Junko

栗原 明美<sup>1)</sup>  
KURIHARA Akemi

中林 菜穂<sup>2)</sup>  
NAKABAYASHI Nao

近藤 ふさえ<sup>1)</sup>  
KONDO Fusae

#### 要 旨

COVID-19 感染流行に伴い、オンラインで模擬患者を導入した成人看護実習Ⅱ（慢性期）を行った。教員が演じる模擬患者とコミュニケーションをとりながら実習を進める中で、学生が抱く思いに疑問を持ったため、実習後にアンケート調査を行った。そのアンケート調査結果より、学生は教員を患者と思えないほか、患者をイメージしにくいと思っていたことがわかった。またオンライン実習では教員が模擬患者と実習指導の両方を担うため、学生1人当たりの時間制限が必要だったことにより、学生は与えられた時間を意識せざるを得ず、不満足感を抱いていた。しかし、患者をイメージしにくいと思いつつも看護過程は展開することができたと考えていた。学生は画面を通してのコミュニケーションに困難感を抱くことは少なく、オンライン実習ではコミュニケーション技術を再確認したり、記録を深めることができたりといった効果もあった。

索引用語：成人看護実習、慢性期、オンライン、模擬患者、コミュニケーション

Key words：Adult nursing practice, Chronic stage, Online, Simulated Patient, Communication

#### 1. はじめに

COVID-19 感染流行に伴い、2020年4月16日に全国を対象として緊急事態宣言が発令され<sup>1)</sup>、本学部の授業はオンラインを使用した授業へと移行すること

となった。臨地実習に関しても文部科学省高等教育局医学教育課の通達内容を参考に<sup>2)</sup>オンラインで行う方法を模索する必要性に迫られた。この状況に対応したオンライン実習に関しては、医学教育の分野で実践報告があるが<sup>3)4)5)</sup>、看護教育の分野の実践報告は見あたらない。

成人看護実習Ⅱ（慢性期実習）ではChronic illnessと共に生活する人を理解するという目標があるが、オンラインで実施可能なものは何かと検討し

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 順天堂大学大学院医療看護学研究科 修士課程

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Master's Course in Juntendo University Graduate School of Health Care and Nursing*

た。その中で、模擬患者とコミュニケーションをとることで情報収集能力や看護倫理観を高め、収集した情報を基に看護過程を展開して看護ケアを行うというオンライン実習を企画した。

看護教育に模擬患者が参加する試みは以前から行われており、1970年代には藤枝<sup>6)</sup>が看護学総論に模擬患者を導入した報告を行っている。成人看護学実習に関しては小浜ら<sup>7)</sup>が脳梗塞右片麻痺模擬患者の援助に関する報告をしており、1990年代には面接技法やインタビュートレーニングとして模擬患者が看護教育へ参加するようになった<sup>8)9)</sup>。本学部でも学生はOSCE(客観的臨床能力試験)などで一般市民による模擬患者の協力を得て学習する機会がある。しかしながら今回はCOVID-19感染流行のために画面を通して模擬患者と対面するという、今までの模擬患者が参加する看護教育とは異なった状況で、模擬患者を使用した実習を行った。

オンライン実習中に教員が演じる模擬患者と画面を通してコミュニケーションをとるという実習について、学生が抱く思いがどのようなものかという疑問が起こった。そこでオンライン実習後にアンケートを実施し、学習効果や課題について検討することを目的とした。

## II オンライン実習の実際

### 1. 成人看護実習IIの目的・方法

成人看護実習IIは、Chronic illnessによって健康障害をもつ人およびその家族に対して看護援助を行いながら、発達段階を踏まえて身体的、心理的、社会的側面から理解することを目的としている。患者を理解するために、ゴードンの機能的健康パターンを概念枠組みとして用いており、アセスメントの結論として看護診断を確定し、その診断を基に計画を立案して実施し、評価や修正、再計画をしている。この方法により、患者の理解を深めるとともに思考プロセスも深める

実習である。

### 2. オンライン実習の方法

オンライン実習では、教員が模擬患者を演じ、学生はオンラインミーティングツールであるZoomの画面上で模擬患者とコミュニケーションをとるという実習場面を設定した。入院前の状況は医師のカルテ記入を想定して作成し、入院後はバイタルサイン測定や血液データ、レントゲン検査などの結果をクラウド型教育支援サービスのmanabaへ実習日の朝に提示した(図1)。学生はその情報をふまえて、教員が演

図1 実習3週間前のスケジュール

	月	火	水	木	金
1週目	オリエンテーション 外来診療情報提示	入院時情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談
2週目	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談
3週目	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	日々の情報提示 模擬患者と面談	記録のまとめ	

部分で学生は模擬患者とコミュニケーションをとった。  
\*学習状況により、学内日を1日程度設ける場合もあった。

じる模擬患者と面談を行い、コミュニケーションを通して情報を得たり、計画を仮想実施したりした(図2)。面談後は教員と場面を振り返ったり、看護過程の記録を通して患者を理解したり、学生の進捗状況を考慮して計画や実施評価を共有するカンファレン

図2 教員の实習指導の実際—ある1日の実習展開—

時間	実習内容
9:00~	manabaで本日の患者情報を提示 Zoomでグループメンバー全員と確認・伝達事項の共有 ・体調確認 ・行動目標、ケア実施の確認
9:30~	Zoomで個別に実習指導 ・教員(模擬患者)と面談・ケア実施 ・時間は、学生1名につき30分~1時間程度 ・面談・ケア実施内容をふまえ、コミュニケーションについて指導 ・看護過程の進捗状況確認、適時指導
15:00~	Zoomでグループメンバー全員によるカンファレンスを実施 【カンファレンステーマの例】 ・「生活者」に関する文献についての意見交換 ・模擬患者の関連図、ケアプランの発表 ・感染対策や消毒の実施状況について
16:00	実習終了

スを設けたりすることで成人看護実習Ⅱの目的を達成できるように企画した。学生が模擬患者と面談する時間や教員に記録の指導を受ける時間、カンファレンスの実施は学生の状況を踏まえて各教員が実習時間内で工夫した。教員は1クールの実習期間で6～7名の学生を担当した。

5月のグループは癌が見つかったばかりのステージⅢbの肺癌患者で化学療法と放射線療法を行うために入院した症例、6月のグループは糖尿病性腎症が悪化し内シャント造設術を受けるために入院した症例とした。

教員は模擬患者を演じる際、学生が希望する場面を聞き、学生が病室への入室から退室までの中で会話やフィジカルアセスメントを通して情報収集や計画を仮想実施する機会が得られるようにした。模擬患者は学生ごとに性格や食事の好み、趣味などが異なるようにして、計画に個別性が反映されやすいように工夫した。

### 3. 対象学生の背景

本学部では領域別実習を3年後期～4年前期に実施している。オンライン実習の対象学生は3年後期に臨地で成人看護実習Ⅰ(急性期実習)と高齢者看護実習Ⅱ(病院・療養施設実習)を修了している。これらの実習では成人看護実習Ⅱと同様の看護過程の展開を経験している。

## III 調査の実施方法

### 1. 実施期間

2020年5月～6月

### 2. 実施対象者

2020年5月～6月にオンラインで成人看護実習Ⅱを履修した4年生39名

### 3. 調査方法

オンライン実習後にmanabaのアンケート機能を利用して実施した。アンケート内容はZoomを使用

した模擬患者からの情報収集や計画の仮想実施に関しての抵抗感、模擬患者から得た情報を基にした看護過程、Zoomによるカンファレンスや教員への質問といったコミュニケーション、オンライン実習のメリットやデメリットに関する内容を4～5段階のリッカート尺度で調査した。4段階リッカート尺度は「あった/できた」「どちらかというとなかった/できなかった」「なかった/できなかった」とした。Zoomによるカンファレンスや教員への質問といったコミュニケーションの内容は5段階尺度として、「言いやすかった」「どちらかというと言いやすかった」「今までの実習と変わりなかった」「どちらかというと言いにくかった」「言いにくかった」とした。

### 4. 分析方法

選択式の問いはExcelを使用して単純集計し、自由記述は整理分類を行った。

## IV 倫理的配慮

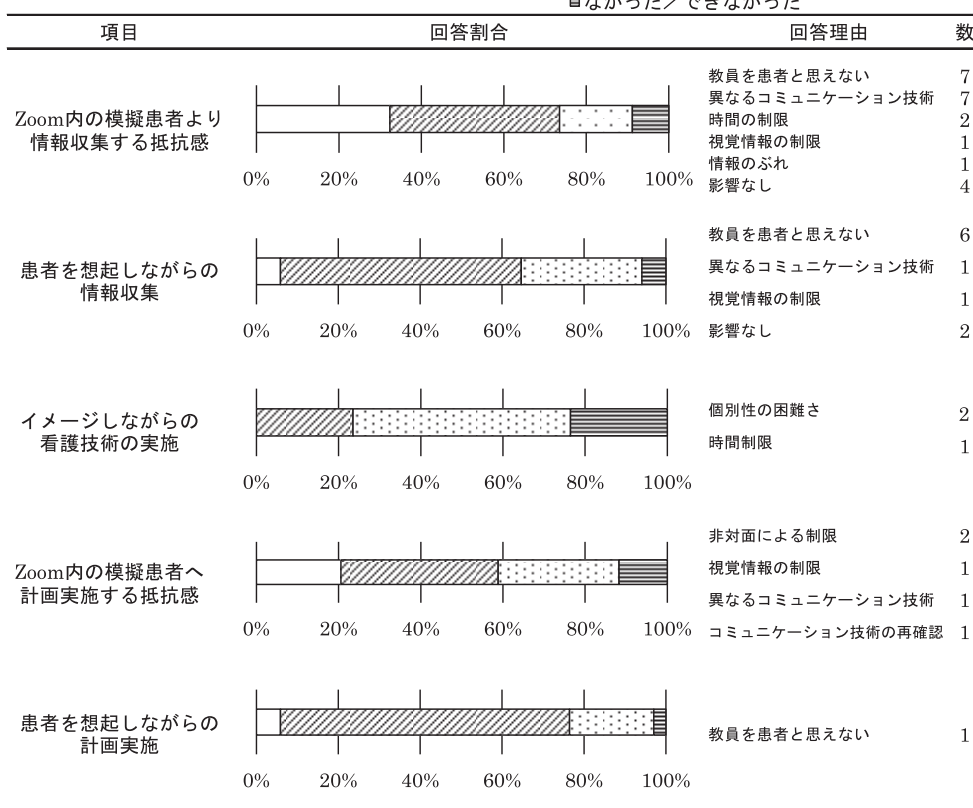
対象学生にはmanabaにて、アンケートへの協力は任意であることや成績に影響がないこと、個人が特定されないように取り扱うことを説明した。

## V 結果

成人看護実習Ⅱでオンラインを履修した学生39名に調査を依頼し、34名から回答が得られ、回収率は87.2%だった。

Zoomを使用した模擬患者からの情報収集や計画の仮想実施に関しての抵抗感について表1に示す。模擬患者を教員が担ったために教員を患者と思えないことや画面越しのために今までとは異なるコミュニケーション技術が必要となったことで、情報収集や計画の実施に学生は抵抗感を抱いていた。また画面を通して看護技術をイメージすることも困難であったが、患者を想起しながらの情報収集や計画実施は

表1 模擬患者に対する思い

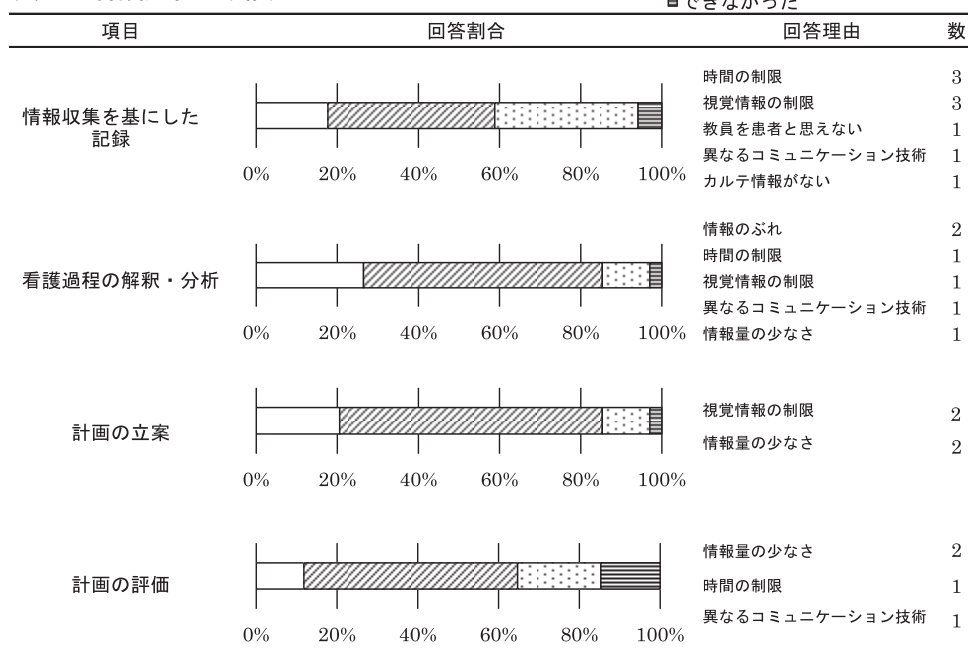


できた」と回答している学生が6割を超えていた。

模擬患者から得た情報を基にした看護過程について表2に示す。模擬患者との対面時間の制限や視覚情

報の制限などがあるため情報収集は十分とは言えないものの、得られた情報を基に看護過程の解釈・分析や計画の立案ができた」と回答した学生が8割を超

表2 看護過程の展開

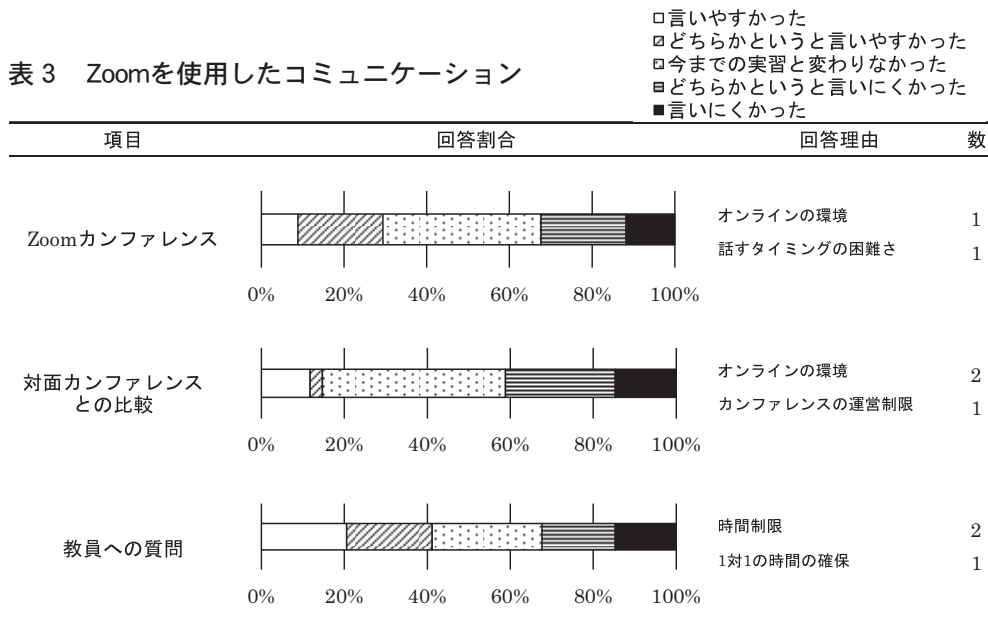


えていた。計画の評価に関して6割以上の学生ができたと回答した。

Zoomによるカンファレンスや教員への質問といったコミュニケーションについて表3に示す。Zoomで

カンファレンスを行うことや画面を通して教員へ質問することは、学生によって発言のしやすさに偏りはなく、今までの実習と変わらないと回答した学生の割合が一番多かった。

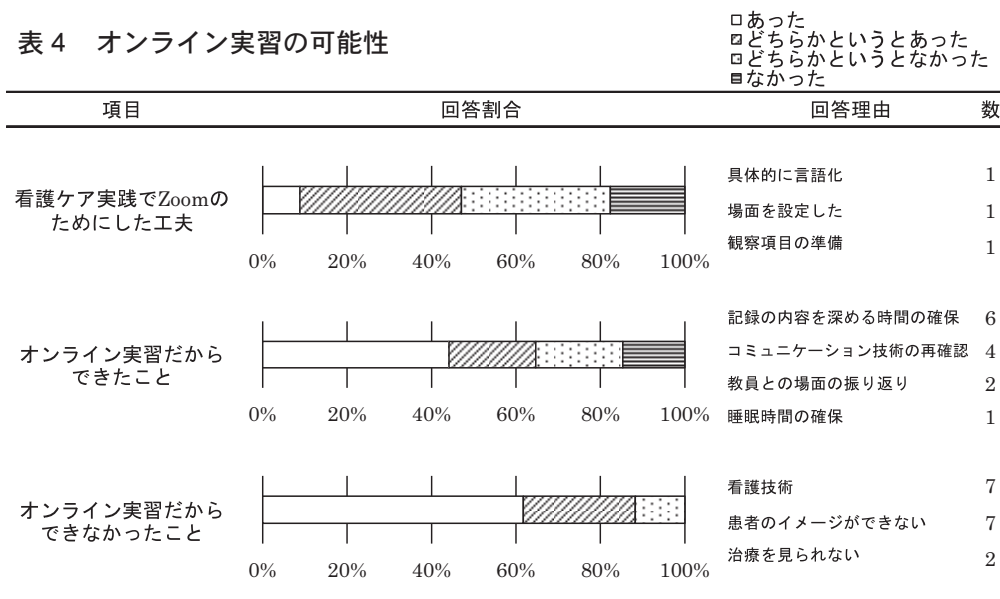
表3 Zoomを使用したコミュニケーション



オンライン実習のメリットやデメリットについて表4に示す。オンライン実習だからできたことがあると6割以上の学生が回答しており、理由として記録の内容を深める時間や睡眠時間の確保ができたこと、コミュニケーション技術の再確認や教員との場

面に振り返りを理由として挙げていた。学生は模擬患者へ画面を通して看護ケアを実践するために、具体的に言語化したり、場面を設定したりといった工夫をしている学生もいたが、工夫をした学生は5割にも満たなかった。オンライン実習だからできなかつ

表4 オンライン実習の可能性



たことがあると8割以上の学生が回答しており、理由として看護技術や患者をイメージできないこと、治療を見られないことを挙げていた。

## VI. 考察

日本看護系大学協議会<sup>10)</sup>が2020年1月から9月までの看護学実習におけるCOVID-19の影響を教員に対して調査した報告書によると、成人看護学領域ではオンラインで複数日にわたって情報が更新される架空事例の看護過程を展開したり、大学院生や教員が模擬患者を演じたりと、今回の成人看護実習Ⅱと似たような実習を行っていた。この報告書では学生の学習進度や参加状況が把握しやすいといったような教員にとって良かった点や、実習準備や学習意欲を高める大変さといった良くなかった点が挙げられており、教員視点でのオンライン実習の困難さが示されている。成人看護実習Ⅱも実習準備や学習意欲を高める大変さはあったが、コミュニケーション技術や看護倫理観の向上、看護過程の展開といった実習目標は達成できていると教員視点では考えている。

### 1. 学生の抵抗感

今回のアンケート結果より、学生は教員を患者と思えず、情報収集や計画の実施に抵抗感を抱いていた。慢性看護学演習のロールプレイに関して、山本ら<sup>11)</sup>は日ごろから接している教員が模擬患者と看護師役になって行ったことで、リアリティという面では十分ではないと報告しており、今回の学生も日ごろから接している教員を患者であると想像することが困難だったと考えられる。また教員は1クールの実習期間で6~7名の学生を担当し、毎日模擬患者を演じる一方で記録を含めた実習指導も行うため、1対1の時間を必ず確保できるが、学生1人に対する時間は制限をかけざるを得なかった。そのため時間制限を意識する結果となったと考えられる。演習において、教員は目標を達成していると考えても時間制限があ

ると学生は不満足感があるという報告もあり<sup>12)</sup>、今回の学生も模擬患者からの情報収集は行えているが、自分自身のペースで実施していないことにより、不満を抱いたといえる。長家<sup>13)</sup>はコミュニケーションがうまくいかなかった理由を自分自身ではなく、相手側にあると考える学生の傾向を報告しており、学生はうまくできない状況を時間に制限があるといった、他の要因に求めた可能性もある。その他にも臨地実習では例え受け持ち患者のベッドサイドへ行かずとも電子カルテをみたり、他の学生のケアを手伝ったりという時間があるが、今回のオンライン実習では教員と関わる時間以外は記録と向き合う時間となり、限定された時間を意識しやすかったとも考えられる。

### 2. 看護過程の展開と患者イメージの乖離

教員が演じる模擬患者から得られる情報が不十分であると考えつつも、学生は得られた情報から看護過程を展開することができたと考えている。そのため学生が欲しいと考える情報は、必要だから収集しているというよりも何でも知っていれば安心であるという内容の可能性もある。また看護過程を展開する中で関連図を通して患者の全体像を把握しているが、関連図が描けていても患者をイメージできないという学生もいた。したがって、看護過程を基に患者を理解する方法は学生にとって一助に過ぎず、臨地実習の場で学生自身が自分の目で見なければ患者をイメージして理解できない可能性もある。藤井<sup>14)</sup>はPCやスマートフォンなどによる間接的なコミュニケーションの機会が増大したことにより対人関係スキルの成長を阻害する要因となっていると報告しており、山本ら<sup>15)</sup>は異世代間でのコミュニケーションが少ない現代の学生にとって、慢性病患者の生活や気持ちをイメージすることは容易ではないと考えられると報告している。また大池ら<sup>16)</sup>は臨床経験のない学生にとって、病床環境のイメージや入院手続きなどに関する情報の不足があり、難易度の高い演習課題で

あったと報告している。今回の学生もこれまでの生活経験が模擬患者のイメージ化に影響している可能性があり、患者をイメージできるようになるためには異世代間のコミュニケーション機会も含めて多くの生活経験が必要であると考えられる。異世代コミュニケーションという点で、学生は3年次に臨地で成人看護実習Ⅰ（急性期実習）と高齢者看護実習Ⅱ（病院・療養施設実習）を履修しているため、実習経験を積み重ねていることにより、患者像はイメージしやすいと考えていた。しかし、他の臨地実習を経験していても実習目標が異なるため、臨地実習経験だけではイメージ化の助けになりにくい可能性がある。そのため、積み重ねた臨地実習の経験を活かせるように教員は関わっていく必要がある。

### 3. Zoomを利用したコミュニケーション

オンライン実習においては、Zoomでカンファレンスを行ったり、画面を通して教員へ質問したりと学生も教員も経験をしたことがない状況ではあったが、この方法のコミュニケーションに関して今までの実習と変わらないと回答した学生が最も多く、画面を通してのコミュニケーションが障害となっている学生は少なかった。Zoomを使用したコミュニケーションが障害とならなかった理由として、2000年代より国家戦略となったICT<sup>17)</sup>も一因として挙げられる。学生は生まれたころよりパソコンは身近なものであり、スマートフォンは生活に欠かせないものであるほか、デジタルコンテンツに慣れ親しんでいるという世代のため、画面を通じてのコミュニケーションに違和感をもたなかったと考えられる。

### 4. オンライン実習による利点と欠点

オンライン実習だからできたこととして、コミュニケーションの再確認や教員との場面の振り返りが挙げられていた。渡邊ら<sup>18)</sup>は模擬患者とのコミュニケーションを通して、コミュニケーションの重要性を認識すると報告しており、オンライン実習の中でも実施可

能なコミュニケーションに関して、考える機会となった。その他に記録の内容を深めることができたと回答した学生もあり、調べたり考えたりする時間が十分に取れたといえる。

オンライン実習だからできなかったこととして看護技術の実践や治療を見られないという項目が挙げられた。看護技術はオンラインで実践が困難なものが多いが、治療に関しては内容によって工夫の余地がある。今回の模擬患者の治療に関しては、3年前期までに演習や授業において体験や映像で学習した内容を組み合わせたものだったが、以前に授業で見ているというのではなく、「その時に見た」ということが必要だったと考える。

オンライン実習では看護技術のように実践が困難なものがあるため学習には限界があるが、今回の方法で実習を行うことによって、コミュニケーションの再確認や記録の内容を深める時間や質の確保は行えるといえる。しかし、この実習の対象学生は4年生で、領域実習の終盤であったことから、オンライン実習を計画する際は、対象学生がどのような実習経験をしているのかも考慮しなければ、今回のような成果が得られない可能性がある。

## VII. まとめ

1. 教員が模擬患者を演じることに学生は抵抗感を抱く。
2. オンライン実習において学生は看護過程が展開できても患者をイメージできるとは限らない。
3. オンライン実習でも学生はコミュニケーション技術を考える機会となる。

## 謝 辞

アンケートにご協力いただいた学生の皆さんに感謝申し上げます。

## ＜参考・引用文献＞

- 1) 日本国政府(2020.4.7): 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更 ([https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen\\_gaiyou0416.pdf](https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen_gaiyou0416.pdf))
- 2) 文部科学省・厚生労働省(2020.2.28): 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について (<https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>)
- 3) 民谷健太郎: オンライン臨床実習の実践報告～教員の時間的コスト・労力的コストを抑える工夫～, 医学教育, 51 (3), 252-254, 2020.
- 4) 近藤猛, 高見秀樹, 錦織宏: オンライン臨床実習にも転用可能なオンラインPBLの実践報告, 医学教育, 51 (3), 276-278, 2020.
- 5) 鋪野紀好, 塚本知子, 生坂政臣: 千葉大学総合診療科におけるオンライン臨床実習の取り組み, 医学教育, 51 (3), 286-287, 2020.
- 6) 藤枝知子: 看護学総論における Simulated-patient(模擬患者)導入の試み, 医学教育, 8 (3), 186-187, 1977.
- 7) 小浜裕子, 小野沢康子, 鈴木正子, 他: 成人看護学学内実習の一考察 脳梗塞右片麻痺模擬患者の援助に対する技術評価について, 埼玉県立衛生短期大学紀要, 14, 29-35, 1989.
- 8) 大滝純司: 模擬患者を使った面接技法 日本での試み 日本の看護教育への模擬患者導入の意義, 看護展望, 18(8), 897-899, 1993.
- 9) 白浜雅司, 井上悦子: 模擬患者 (Simulated Patient) を用いたインタビュートレーニング, 看護教育, 37(4), 271-275, 1996.
- 10) 日本看護系大学協議会(2020.12.11): 2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果(科目別) ([https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19\\_surveyBreport.pdf](https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyBreport.pdf))
- 11) 山本裕子, 池田由紀, 今戸美奈子, 他: 模擬糖尿病患者を利用した慢性看護学演習の効果と課題, 大阪府立大学看護学部紀要, 12(1), 1-10, 2006.
- 12) 兒玉尚子, 納富史恵, 藤丸千尋: 小児看護学における模擬患者を活用したコミュニケーション技術演習の検討, 日本小児看護学会誌, 18(1), 79-84, 2009.
- 13) 長家智子: 看護学生のコミュニケーションに関する研究—生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて—, 九州大学医学部保健学科紀要, 1, 71-82, 2003.
- 14) 藤井徹也: 看護技術としてのコミュニケーションスキルを指導する, 看護教育, 61(1), 6-12, 2020.
- 15) 山本裕子, 池田由紀, 土居洋子: 臨地実習前のロールプレイングによる慢性看護学演習の効果の検討, 大阪府立大学看護学部紀要, 13(1), 43-50, 2007.
- 16) 大池美也子, 末次典恵, 山本千恵子, 他: 医療職教育機関における模擬患者を含むコミュニケーション教育—平成16年度の教育実践から—, 九州大学医学部保健学科紀要, 5, 101-112, 2005.
- 17) 総務省(2020.8.4): 令和2年版情報通信白書 (<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/pdf/02honpen.pdf>)
- 18) 渡邊聡美, 山崎歩, 中村もとゑ, 他: 看護基礎教育における模擬患者参加型教育の教育効果と課題—教員の視点から—, 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 21-28, 2016.